

『神のみこころに生きる』 ヤコブの手紙 4 章 11~17 節

1. 互いに悪口を言い合わない

ヤコブは 2 章で、あなたがたに信仰があると言っても行いがなかったら、そのような信仰が人を救うことができるでしょうか、とチャレンジしました。そして 3 章ではその具体的な適用として言葉の問題を取り上げました。そして 4 章 1~2 節のところでは、心の高ぶりについて警告しました。「あなたがたの間の戦いや争いは、どこから出て来るのでしょうか。ここから、すなわち、あなたがたのからだの中で戦う欲望から出て来るのではありませんか。あなたがたは、欲しても自分のものにならないと、人殺しをします。熱望しても手に入れることができないと、争ったり戦ったりします。」つまり、「神のみこころ」よりも、自分の思いのままに生きていきたいのです。そういう彼らにヤコブは、「主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます。」と勧めたのであります。そして、その流れの中で、兄弟の「悪口」を言うことと、「神のみこころ」に生きることが語られています。

さて、11~12 節に「兄弟たち、互いに悪口を言い合ってはいけません。自分の兄弟について悪口を言ったり、さばいたりする者は、律法について悪口を言い、律法をさばいているのです。もしあなたが律法をさばくなら、律法を行う者ではなく、さばく者です。律法を定め、さばきを行う方はただひとりで、救うことも滅ぼすことができる方です。隣人をさばくあなたは、いったい何者ですか。」とあります。10 節で「主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます。」と勧めたヤコブは、ここで「悪口」の問題を取り上げています。「悪口」を言うことは、その場にいない他の人をけなすことです。「悪口を言ったり、さばいたりする者は、律法について悪口を言い、律法をさばいているのです。」と指摘するヤコブは何が言いたいのでしょうか。いったいなぜ「悪口」を言ってはいけないのでしょうか。なぜなら、「自分の兄弟について悪口を言ったり、さばいたりする者は、律法について悪口を言い、律法をさばく」ことになるからです。

どういうことですか？この「律法」とは、イエス様が言われた「律法」のことです。イエス様は、マタイの福音書 7 章 1~2 節で「さばいてはいけません。自分がさばかれないためです。あなたがたは、自分がさばく、そのさばきでさばかれ、自分が量るその秤で量り与えられるのです。」と言われました。というのは、私たちは人をさばいた後で、自分も同じことをしてしまう愚かな者だからです。しかしこれは、私たちは隣人に対して注意や否定的なことを一切言ってはいけないということでしょうか。私たちは万事を善意に解釈すべきなのでしょうか。ここでヤコブが言いたいのはそのようなことではありません。実際に私たちは自分や他の人たちの生き方を神の「律法」の光に照らして適切に評価することができますし、またそうすべきなのです。

ヤコブの第一の主張は、私たちは自分に都合が良いように人々を評価してはいけないということです。そして第二の主張は、この評価がどのような意味で、またどのような目的で行われるものであるかを忘れないということです。確かに神の「律法」は否定的な目的で使用することもできます。

パウロはローマ人への手紙 2 章 1 節で「ですから、すべて他人をさばく者よ、あなたに弁解の余地はありません。あなたは他人をさばくことで、自分自身にさばきを下しています。さばくあなたが同じことを行っているからです。」と言っています。ですから、私たちは他人をさばくことはできません。にもかかわらず、人をさばき、他人の「悪口」を言うようなことがあるとしたら、それは「律法」をさばく者となり、その「律法」によってさばきを免れないのは当然のことです。私たちは「律法」を守るために召されたのであって、「律法」をさばくために召されたのではないのです。

それでは、誰がさばかれるのでしょうか。それは神ご自身です。「律法を定め、さばきを行う方はただひとりで、救うことも滅ぼすこともできる方です。」兄弟の「悪口」を言うことは、ある意味で正しいことかもしれません

ません。なぜなら、兄弟の「**悪口**」を言うということはその兄弟に非があるからで、そのように言われても仕方ないからです。けれども、このような非に対して、私たちはさばく権利を持っていないのです。なぜなら、さばきを行うのは、神だけであって、私たちにはないからです。

パウロは、コリント第一4章3～4節で「**しかし私にとって、あなたがたにさばかれたり、あるいは人間の法廷でさばかれたりすることは、非常に小さなことです。それどころか、私は自分で自分をさばくことさえしません。私には、やましいことは少しもありませんが、だからといって、それで義と認められているわけではありません。私をさばく方は主です。**」と言っています。つまりパウロはここで、他人をも、自分をもさばかないと言っているのです。なぜなら、自分をさばかれるのは**主**ご自身であるからです。たとえ自分には罪がないと言っても無罪とされることはありません。神の前に立たされるなら、誰が自分は正しい者だと主張することができるでしょうか。そのような者を、神は救ってくださいました。このような者が他人をさばくことができるでしょうか。さばかれるのは神だけであって、私たちは**神**に取って代わることはできません。もしそのようなことを平気で行っているとしたら、それは越権行為であり、そうした行為に対する神のさばきが下るのは当然のことなのです。つまり兄弟の「**悪口**」を言うことの本質的な問題は、知らず知らずのうちに自分が神になっていること、それほど自分がおごり高ぶっていることなのです。ヤコブはそのことをここで「**隣人をさばくあなたは、いったい何者ですか。**」と言っています。

ですから、兄弟をさばくことはやめましょう。互いに「**悪口**」を言い合ってはいけません。それは「**神のみこころ**」ではないからです。神の「**みこころ**」は何でしょうか。「**神のみこころ**」は、「**互いに愛し合うこと**」です。ペテロ第一4章8節に「**何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。**」とあります。もし兄弟の「**悪口**」を言うようなことがあるとしたら、それはその人の中にある誇りや高ぶりがあるからであって、自分の行いをよく調べてみれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りであって、他の人に対して誇れることではないことに気が付くことでしょう。ガラテヤ書6章3節に「**だれかが、何者でもないのに、自分を何者かであるように思うなら、自分自身を欺いているのです。**」とあります。

2. 主のみこころならば

13～15 節に「**今日か明日、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をしてもうけよう**」と言っている者たち、よく聞きなさい。あなたがたには、明日のことは分かりません。あなたがたのいのちとは、どのようなものでしょうか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それで消えてしまう霧です。あなたがたはむしろ、「**主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう**」と言るべきです。」とあります。さばきを神にゆだねず、自分でさばくという態度は、自分の計画を立てるときにも現われます。

「**今日か明日、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をしてもうけよう**」と言っている者たち、よく聞きなさい。」とありますが、計画すること自体は問題ではありません。問題はその商売への自信だけでなく、自分の生き方や人生の決定まで自分でできると過信していることです。日本語には訳されていませんが、13 節の主語は「**私**」です。今日か、明日、私たちはこれこれの町に行き、これこれをしようと、全部自分で時を定め、場所を定め、期間を定め、やるべきことを定めています。自分でいろいろなことを計画して、自分で成し遂げようとします。もしかしたらそれができるかもしれません。

しかし、箴言19章21節に「**人の心には多くの思いがある。しかし、【主】の計画こそが実現する。**」とあるように、主の「**みこころ**」だけが成るのです。ヤコブは、自分であれこれと計画を立て、自分でそれを達成しようとしている人たちに向かって、14 節で「**あなたがたには、明日のことは分かりません。あなたがたのいのちとは、どのようなものでしょうか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それで消えてしまう霧です。**」と言っています。あなたがたは、明日ことはわからないのです。昨日までみんなに元気だったのに急に病気になってしまったり、ちょっとしたことで思い悩み夜も眠れることもあります。こんなはずじゃなかったのにと、

自己憐憫に陥ってしまうこともあります。避けられない災害によって生活が一変してしまうこともあります。将来を保証されていた人が、ちょっとしたことで人生を棒に振ってしまったということもあります。人生は複雑で、不確実なのです。この先何が起こるのかは誰にもわかりません。

ヨブはそんな人間の姿をヨブ記 14 章 1~2 節で「**女から生まれた人間は、その齢が短く、心乱されることで満ちています。花のように咲き出てはしおれ、影のように逃げ去り、とどまることがありません。**」と言いました。ヨブはここで人間の一生を花と影にたとえています。花のように咲いたかと思ったらすぐに切り取られ、影のようにできたかと思ったらすぐに消えてしまいます。それはほんとうにはかなく、むなしいものなのです。そんな人間が自分を誇ってみたところでいってい何になるというのでしょうか。

ですから、ヤコブは 15 節で「**あなたがたはむしろ、「主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう」と言うべきです。**」と勧めるのです。私たちが何か計画をたてる時、決して見逃してはならないとは、「**～あれば**」ということです。「**主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう**」ということです。ヤコブはこの箇所で計画を立てることをすべて否定しているように見えるかもしれません、そうではありません。ヤコブは計画を立てること自体は認めています。ここでヤコブが手紙の読者に強調したいのは、計画を立てる時にも神のことを忘れるべきではないということです。あたかも神など存在しないかのような態度で計画を立てるべきではありません。

箴言 27 章 1 節に「**明日のことを誇るな。一日のうちに何が起こるか、あなたは知らないのだから。**」とあります。またルカの福音書 12 章 16~20 節に「**それからイエスは人々にたとえを話された。「ある金持ちの畠が豊作であった。彼は心の中で考えた。『どうしよう。私の作物をしまっておく場所がない。』**」そして言った。**『こうしよう。私の倉を壊して、もっと大きいのを建て、私の穀物や財産はすべてそこにしまっておこう。そして、自分のたましいにこう言おう。「わがたましいよ、これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ休め。食べて、飲んで、楽しめ。』**しかし、神は彼に言われた。**『愚か者、おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』**とあります。

人間は何年でも先の計画を立てることはできます。にもかかわらず、実際には「**あなたがたには、明日のことは分かりません。**」なのです。私たちが皆知っているように、誰一人としてそのような主権を持っている者はいません。私たちは、明日のことはわからないのです。ですから、「**主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう**」というのが正しい生き方なのです。「**主のみこころであれば**」というのは、「**すべてのことに主を認める**」ということです。主の許しがあってこそ事がなされ、成功もできるということを認め、神の「**みこころ**」は何であるかをわきまえるために、心の一新によって自分を変えることなのです。

パウロは、エペソで伝道していた時、エペソの人々が、もっと長くとどまるようにと頼みましたが、それを聞き入れないで、「**神のみこころなら、またあなたがたのところに戻って来ます**」(使徒 18:21) と言って別れを告げ、エペソから船出しました。

また、コリントの教会でも「**私は今、旅のついでにあなたがたに会うようなことはしたくありません。主がお許しになるなら、あなたがたのところにしばらく滞在したいと願っています。**」(I コリント 16:7) と言いました。「**神のみこころなら**」、「**主がお許しになるなら**」という態度は、私たちの立てる全ての計画において持つべきものです。私たちの立てる全ての計画は、主の御手にゆだねなければなりません。主もまた、私たちの人生に計画をお持ちなのです。エレミヤ書 29 章 11 節には「**わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている—【主】のことば—。それはわざわいではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。**」と書かれています。また、イザヤ書 55 章 8~9 節には「**わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、あなたがたの道は、わたしの道と異なるからだ。—【主】のことば— 天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。**」とあり

ます。あなたは、自分自身のことや将来についてどのように考えておられるでしょうか？実は、私たちよりも神の方がもっと完全な計画をもっておられるのです。神の計画はあなたの計画よりもはるかに高いものだということを。あなたの人生における「**主のみこころ**」とご計画は実に完全なものなのです。

私たちが計画を立てることは決して間違ったことではありません。しかし、その計画の中に「**もしみこころであれば**」を入れてください。「**主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう**」と、「**主のみこころ**」を求めて生きる人こそ、本当に神の御前でへりくだっている神のしもべなのです。

3. むなしの誇りを捨てて

16 節に「**ところが実際には、あなたがたは大言壯語して誇っています。そのような誇りはすべて悪いことです。**」とありますが、「**主のみこころ**」に生きるために、むなしの誇りを捨てましょう、ということです。

「**大言壯語**」とは、辞書に「自分の実力や能力、あるいは現実とかけ離れた、できもしないような大きなことや、内容が伴わない大げさな言葉を使うこと」とあります。また、いわゆる「ほら吹き」や「大風呂敷を広げる」ことと同義で、多くの場合、中身が伴わない口先だけの言葉として使われます。以前の聖書では、「**大言壯語して誇っています**」が、「**むなしの誇りをもって高ぶっています**」となっています。この「**むなしの誇り**」は、放浪性のあるやぶ医者という語源から派生した言葉だそうです。直っていないのに直ったと言い、やりもしなかったことを誇るのです。

結局、自分であれこれと計画を立て、自分で事を成し遂げようしたり、兄弟の「**悪口**」をいうことのすべては、高ぶっていることに原因があります。むなしの誇りをもって高ぶっているので、さばきを主に任せないで、自分でさばこうとするのです。また、自分の計画を神にゆだねないで、自分で行おうとするのです。そこに「**主のみこころ**」があるのにそれを無視して、自分で果たそうとすること、それが高ぶりです。

17 節に「**こういうわけで、なすべき良いことを知っていながら行わないなら、それはその人には罪です。**」とあります。私たちは、「これはしなければならない」と思いながらも、行っていないことが何と多いことでしょう。罪とは、してはならないことをすることだけでなく、しなければならないことをしないこともそうなのです。それなのに、いかにも自分はやっているかのように錯覚したり、自分にはできるといったむなしの誇りを持つことがどんなに高ぶった愚かなことであるかわかるでしょう。私たちに必要なのは、そんなむなしの誇りを捨てて、悔い改めて、「**主のみこころ**」に生きることなのです。

詩篇 104 篇 34 節で「**私の心の思いがみこころにかないますように。私は【主】を喜びます。**」と作者は歌いました。私の心の思いが「**主のみこころ**」にかなうために、この詩篇の記者は、「**私は【主】を喜びます。**」と言いました。私の思いや計画に神を引っ張り込むのではなく、私たちの思いを「**主のみこころ**」に合わせるのです。そして、あらゆる恵み、幸いにも勝って神ご自身を喜ぶことが、「**主のみこころ**」に生きる道なのです。私たちもまたそのような信仰に歩んでいこうではありませんか。

「**正しい行い**」とは、けっして完全無欠な行動を意味しているのではありません。それは、自分の欲望ではなく神の「**みこころ**」を求めることです。ひたすら謙遜になってイエス様に近づくことです。私たちが一步イエス様に近づくなら、イエス様は百歩私たちに近づいてくださいます。そして「**みこころ**」を教えてくださるのです。祈りはイエス様に近づくこと、また聖書を読むことはイエス様の「**みこころ**」を知ることだと、ぜひ気づいてください。

イエス様は、ヨハネの福音書 4 章 34 節で「**わたしの食べ物とは、わたしを遣わされた方のみこころを行い、そのわざを成し遂げることです。**」と言われました。